

## ひとりよがりの恐ろしさ

〔聖書〕歴代誌下 35章 20～25節

ヨシヤが神殿を整えるために行ったこれらのすべての事の後、エジプトの王ネコがユーフラテス川の近くのカルケミシュを攻めようとして上って来た。ヨシヤはこれを迎え撃つために出陣した。しかしネコは使いを送って言った。「ユダの王よ、わたしはあなたと何のかかわりがあるだろうか。今日攻めて来たのはあなたに対してではなく、わたしが敵とする家に対してである。神はわたしに急ぐようにと命じられた。わたしと共にいる神に逆らわずにいなさい。さもなければ、神はあなたを滅ぼされる。」しかし、ヨシヤは引き返さず、攻撃のために変装して、神の口から出たネコの言葉を聞かなかった。そして彼はメギド平野の戦いに臨んだ。射手たちがヨシヤ王を射た。王が家臣たちに、「傷は重い。わたしを運び出してくれ」と言ったので、家臣たちは王を戦車から降ろし、王の第二の車に乗せてエルサレムに連れ帰った。王は死んで、先祖の墓に葬られた。ユダとエルサレムのすべての人々がヨシヤの死を嘆いた。エレミヤはヨシヤを悼んで哀歌を作った。男女のすべての歌い手がその哀歌によってヨシヤを語り伝えるようになり、今日に至っている。それがイスラエルの定めとなり、歌は『哀歌』に記されている。

### 〔序〕 東北関東大震災の発生

3月11日午後2時46分頃に観測史上最大の強烈な地震が発生してから17日を経過しました。地震直後に大津波が宮城県を中心にして太平洋岸に襲いかかり、各地が壊滅的被害を受けました。激しく押し寄せた15mを超える水の壁が家屋を呑み込み、廃材と化して次の住宅街に襲いかかり、町を一気に廃墟としてしまいました。その恐ろしさをTVの画像でまざまざと見せ付けられ、ぼーぜんとなりました。

死者・行方不明者が3万人に迫り、避難所暮らしをしている方々が25万人おられます。それに加えて福島原子力発電所が、電気系統の被害から原子炉の制御不能に陥り、放射能放出の危険が発生したのです。30キロ以内の住民8万人が退避を余儀なくされ、埼玉アリーナや東京武道館にまで逃げて来て、避難所生活をおられます。さらに農産物や農地の放射能汚染の危険もいわれ出して、農家に深刻な打撃が広がろうとしています。

一昨日、シンガポール経由で祈りのリクエストを受取りました。原子炉の制御回復に被曝の危険の中で任務を遂行しておられる方々の為の祈りです。電力各社が55歳以上の子育ての終わった決死隊を募集したそうです。3号機での作業員の中から遂に被曝者3人が出てしまいました。しかし臨界点の手前で原子炉はからくも留まっています。爆発したら300km以内の生物生存率はゼロに近くなるそうです。自分の犠牲を顧みずに働いている方々が、他にも大勢おられることでしょう。有難いことです。とにかく被害がこれ以上広がらないように切に祈らなければなりません。

被災者の様子がTVや新聞で逐一報道されています。せめて避難所の生活環境が一刻も早く改善され、十分な援助の手がいきわたって欲しいものです。安否の分からない肉親を必死に探し回っ

ておられる方々のやつれた姿に胸が痛みます。「神さま、一人でも多くの方に、再会の喜びをお与えください。病気や体調不良から被災者をお守り下さい。悲嘆と絶望に耐えて、新しい希望を持ち直して立ち上がる力をお与え下さい。互いに助け合って生き抜いていく愛を増し加えて下さい」と祈り続けています。まずは救援募金に精一杯の協力をいたしましょう。昨年12月に竹田牧師と私を招いて5日間の伝道集会をさせて下さった中国の青島韓国人教会から、100万円の募金が送られてきました。有難いことです。

それにしましてもこの突如として襲った大震災をどのように受けとめ、何を学んでいったらよいのでしょうか。私たちは3月に入って列王記下22～23章からヨシヤ王について学んで参りました。今日は彼がエジプトとの戦争に出かけていって39歳の若さで戦死してしまった箇所を学びます。列王記よりも歴代誌の方が状況がよく分かりますので、今朝は歴代誌から、大震災に襲われた国民の一人として、神さまの言葉に耳を傾けて参りましょう。

## [1] ヨシヤの宗教改革

ヨシヤは8歳で南王朝の国王となりました。紀元前640年。神武天皇の即位から20年ほど後のことです。随分昔のことですね。父親のアモン王が家臣たちに殺されたので、急遽王に立てられました。しかしユダ王国の再興を願う側近たちから良い帝王学を授けられたのでしょうか。25歳になる頃には、衰退してきたアッシリア帝国に対してその支配からの独立を図ろうと決意するまでに成長したのです。彼も三代前の曾祖父ヒゼキヤ王と同じく、イスラエルの建国の精神ダビデの信仰に立ち返って、国を立て直すことにしました。

彼は先ず、エルサレムの神殿の修理から取り組み始めました。すると神殿修理工事の最中に、律法の書が発見されたのです。その律法の書を読み聞かされた王は、衣を裂いて深く悔い改めました。代々の王はじめ国民一同が、この律法に耳を傾けて来なかった故に、神の怒りと裁きが激しく下ることを痛切に自覚させられたからです。そこでヨシヤはこの律法の書に記された掟を忠実に実行していきました。書かれていた掟は申命記の中心部分でしたので、ヨシヤの宗教改革は「申命記改革」とも呼ばれています。

神は天地万物を非常によいものとして創造し、今もなお支配しておられる天地の主です。神はご自分に似る者として人間を造り、世界の管理を委ねられました。次に神は、アブラハムを選んでその一族を神の民・祝福の源に据え、全世界に祝福がいきわたるように定められました。これはアブラハム一族の歴史を通して具体的に神の支配を見出して神に従う信仰を、神が求められたということでしょう。

アブラハムは導かれてカナンの地に居住しましたが、その子孫は大飢饉の時にエジプトに移住します。時代を経るうちに彼らはエジプトの奴隷にされましたが、神はモーセを指導者としてエジプトを脱出させ、約束の地カナンに戻しました。その時神はイスラエルの民に、モーセを通して神の民としての掟を与えて、契約を結んで下さいました。掟を守る限り、神は契約通りに彼らの主として、

守り導き祝福し、全世界の民の祝福の源となるのです。ですから神から授かった律法を記した書は、神と神の民との契約の書です。ここに契約に基づいて誠実に交わる神と人の関係が明確にされました。

ヨシヤは神殿で見つかった律法の書をすべての民に読み聞かせ、これを契約の言葉として心を尽くし魂をつくして守り実行することを、全会衆と共にイスラエルの主なる神に誓ったのでした。彼は主なる神以外何ものをも神として拝まないことにしました。豊かな収穫を与える神バアル、商売繁盛の神アシェラ、天候を掌る太陽・月・星を象った神等々、人間が自分の願いをかなえてくれると思われる祈りの対象物を神と称して形に現し、熱心に祈願するいわゆる偶像礼拝を一切禁止し、偶像を焼き捨てました。小高い山や丘に建てられた礼拝所が偶像礼拝に陥りやすいので全て廃止して、エルサレムの神殿で正しく行なわれる礼拝のみに集中することにしました。

ヨシヤの宗教改革はヒゼキヤ以上に徹底していました。そこで列王記の記者はこう記しています。「こうして彼は祭司ヒルキヤが主の神殿で見つけた書に記されている律法の言葉を実行した。彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった」(下 23:25)。

## [2] 無謀な戦死

ところがこのように信仰的で優れた王ヨシヤが39歳の働き盛りに、エジプト王との無用の戦争であっけなく戦死してしまったのです。そしてユダ王朝は彼の息子たちの代でバビロン帝国に滅ぼされ、王以下が捕囚の憂き目に遭うのです。一体これはどうしたことでしょうか。

ヨシヤが戦死した状況を歴代誌下 35 章 20 節以下の記事によって見ていきましょう。20 節「ヨシヤが神殿を整えるために行ったこれらのすべての事の後、エジプトの王ネコがユーフラテス川の近くのカルケミシュを攻めようとして上って来た」。ヨシヤが宗教改革に取り組み始めたのは、王位について 18 年目ですから 25 歳頃です。そして彼はその宗教改革を、アッシリア帝国の衰退に乗じて、その支配下に あった旧北王国の領地に暮す北 10 部族にまで広めていったようです。

列王記下 23:19 には「ヨシヤはまたサマリアの町々にあった聖なる高台の神殿をすべて取り除いた。これらはイスラエルの王たち(即ち北王国の王たち)が造って神の怒りを招いたものであった」と記されています。こうして旧北王国の人々にもエルサレムの神殿に来て正しい礼拝を守るように求めた結果、政治的にも北王国の人々への支配権を確立していったのではないのでしょうか。「ヨシヤが神殿を整えるために行ったこれらのすべての事の後」という言葉から、それがうかがわれます。

そこへエジプト王ネコの大軍が地中海沿岸を北上してきたのです。新興国バビロンに追い詰められていたアッシリアを助けるためでした。目的地はユフラテ川の上流カルケミシュでした。しかしヨシヤはサマリアよりも更に北のメギドの平野まで出向いて行って、エジプト軍を迎え撃とうとしたのです。エジプト王は使者を送って「急いでいるから邪魔をしないでくれ。あなたを敵にはしていない

のだから」と伝えています。メギドは、エルサレムの都から直線距離で 90km、関越自動車道でいえば、起点の練馬から群馬県の前橋です。徒歩かロバで旅をする時代です。相当の遠距離です。どうしてヨシヤはわざわざ出向いていったのでしょうか。

第一に考えられることは、北王国の領地に宗教的だけでなく政治的にも支配権を確立し、ダビデ、ソロモン時代の統一イスラエル王国の復活も夢ではなくなってきた。ここでエジプトと一戦をまじえて武勇を現し、イスラエルの栄光を一挙に確立しようという野心に駆られたのでしょうか。これまで王としての活動はことごとく成功してきたのです。彼は次第に自信家になり、無謀に敢えて挑戦する気概に溢れたのかもしれませんが。家来たちも誰一人王に自重を促していません。

### [3] 信仰者の傲慢

第二に 22 節の言葉に注目したいと思います。「しかし、ヨシヤは引き返さず、攻撃のために変装して、神の口から出たネコの言葉を聞かなかった」。エジプト王ネコは、「わたしと共にいる神に逆らわずにいなさい。さもなければ、神はあなたを滅ぼされる」と言っています。ネコは、今回の出陣が神の御心になつているという、彼なりの信仰がありました。だから彼に邪魔する者には、神の裁きが下るとヨシヤに伝えたのです。

しかしヨシヤははるかに信仰的な自分にではなく、異教徒のエジプト王に神が御心を示しお用いになるなど、全く考えてもみないことでした。私たちだって普段聖書を読まない、教会の礼拝にも来ない人から、「私には神さまと一緒に居て下さる。私に反対しないように」などと言われたら、「何言っているんだい。私の方にこそ神さまと一緒に居て下さる」と全く無視してしまうのではないのでしょうか。

しかし聖書は「ヨシヤは神の口から出たネコの言葉を聞かなかった」と記しています。この時のネコの言葉は、神の口からでた言葉だったのです。神は異教徒ネコを通して、自分の僕ヨシヤに語りかけたのです。自分こそ神の心を一番良く知っている。神は敬虔な信仰者に直接語ってくださる。こう思ったとすれば、ヨシヤのうぬぼれです。神はこの自分を成功させることで、栄光を現されると考えるならば、ヨシヤの傲慢です。神は、異教徒だろうと、無信心者だろうと、敵であろうとお用いになって語られるのです。信仰者を滅ぼすことによってでも、栄光を現されるのです。神を独占出来る者は誰一人いないのです。ヨシヤはエジプト王の言葉を聞いた時に、彼自身でも、一層心を注いで祈るべきでした。

かつて神殿から出てきた律法の書を読み聞かされた時、彼は衣を裂いて恐れ戦きました。そしてこれが本当に神の言葉かどうか、預言者フルダに尋ねて、確認しています。どうしてこの時も祈らなかったのでしょうか。25 歳の未熟な彼は 39 歳になっていました。その間に国王として素晴らしい業績を数々上げてきました。信仰的にも最高の評価を受けるようになりました。自信満々、もう神に一々御心を尋ねなくてもよくなってしまったのでしょうか。

唯我独尊という言葉があります。我一人尊しとする独りよがり・独善を指します。これがヨシヤ王の命取りとなってしまったのです。これほど素晴らしい信仰者を死に追いやるとは、驕り高ぶりの何と恐ろしいことでしょうか。

### [結] イエスを十字架につけた罪と神の愛

イエス・キリストは、ベツレヘムの馬小屋で生まれ、都から遠く離れたナザレの村大工の子として育ち、ガリラヤ地方という田舎で福音を説き、数々の奇跡をもって貧しい人々を助けられました。学歴も地位も名誉もありません。このイエス・キリストを、都の大祭司・祭司長・学者や熱心な信仰者ファリサイ派の人たちは、神を冒瀆する者として逮捕し、十字架にかけて処刑してしまいました。イエスを通してご自身を現し、命の言葉を語っておられる神の臨在を認めなかったからです。

エジプト王ネコを通して語られる神の言葉を、あの信仰深いヨシヤは聞こうとせず、身を滅ぼしました。この聖書の証言を、ナザレのイエスを前にして、信仰深い大祭司や学者や信仰熱心なファリサイ派の人々は、どうして思い起こさなかったのでしょうか。何のために毎日聖書を読み祈ってきたのでしょうか。どうしてヨシヤの犯した大きな失敗を繰り返したのでしょうか。私たちはここに、人間の弱さ、愚かさ、罪深さを見出します。よくよく心に刻み込まなければなりません。

イエス・キリストを十字架にはり付けて、ユダヤ教の指導者たちは罵りました。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」(マタイ 27:42)。しかしイエス・キリストは、十字架から降りず、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)と祈り、すべての人の罪を一切引き受けて、贖いの死を遂げて下さったのです。

貧しさ、卑しさ、無力さの極みである十字架の死をもって人を救う神の愛。誰がこのような愛と救いを思い浮かべることが出来たのでしょうか。神の救いのみ業は、私たちの思いを超えた、全く自由なみ業なのです。ヨシヤは立派な王なるが故に、この神の自由なみ業が分かりませんでした。大祭司や学者、ファリサイ派の人々も理解できませんでした。神の知恵を理解できる者は誰一人いないのです。

私たちは知らず知らずにひとりよがりになりがちです。謙遜にならなければなりません。貧しさ、卑しさ、無力さを大切にしなければなりません。そして謙虚に、どんな人の言葉からも、神の語りかけを聞こうとしなければなりません。

大震災によって多くの方々が大切な肉親を失い、家や財産を失いました。生き方を変えざるを得なくされました。十字架をもって救いを現された愛の神に心を注いで祈り、助けと導きを求めているものです。

川越に暮しているお蔭で余り被害を受けなかった私たちは、これからどう生きていくべきでしょうか。今でも計画停電で不自由を味わっています。この夏は深刻な電力不足になると言われています。原子力発電にたよる文化をこのまま進めていってよいのでしょうか。世界の一員として日本の国をどのように成長させていくべきでしょうか。被災地の復興、人々の生活再建にどのように協力できるか、真剣に祈り、御心に聞き従って参りましょう。

完